海外だより

欧米の社会福祉専門教育

東京都企画調整局　星　野　信　也

私が1969年から1972年の3か年を過したアメリカ，ボストン市郊外のブランダイス大学，フローレンス・ヘラー社会福祉専攻大学院（以下ヘラー大学院という。）のことを中心にして，欧米の社会福祉専門教育について書くことにする。

私がこの大学院に行くようになったきっかけは，ヘラー大学院の1959年創立以来の学監であったショットランド教授が，国際社会福祉協議会の会長であり，日本の木村忠二郎先生が当時その副会長をしておられたことにあった。もう少し直接には，1970年までヘラー大学院の教授であったD．フレンチ博士が，アジアの社会問題，特に当時の東パキスタン（現バングラデッシュ）の状況に深い関心を寄せ，アジアの問題には西欧で発達した制度や実践技術が役に立たないと悟り，アジアで10年前後の社会福祉経験を持ち，アメリカの社会福祉教育に押し流されずに，批判的にアメリカの教育を吸収し得る者を，ドクター・コースの学生として入れたいと考えたからのようである。

アメリカの社会福祉行政論

私はヘラー大学院が，アメリカの社会福祉専攻大学としては珍らしく，社会福祉行政論，社会計画，それに社会調査に重点を置いたカリキュラム編成であることに興味を惹かれた。それならば1961年から1962年にかけてロンドン政治経済大学で学んだ社会福祉行政論（Social administration）をさらに深めることができると期待した。だが，この期待は私の認識不足によるものであることが直ぐ明らかになった。大学院から学期の始まる前に各コースのレジメと参考文献の印刷されたパンフレットが配られるのだが，それによって，アメリカでいう社会福祉行政論は，イギリスにおけるそれがパブリック・アドミニストレーションのサービス行政版としてのソーシャル・アドミニストレーションであるのと違い，ビジネス・マネジメントの延長としてのソーシャル・アドミニストレーションであることが分ったからであった。もう一つアメリカのソーシャル・アドミニストレーションにコミットするのに躊躇したのは，その講座の担当がV．シーダー博士で，その経験からしても，その研究歴からしても，コミュニティ・オーガニゼーションが専門で，ソーシャル・アドミニストレーションを専門としたことのない人だということであった。

アメリカの大学の欠点

このことは，アメリカの私立大学の制度的欠陥の一例といえるもので（日本に同じ問題がないとはいえないが），教授陣の何人かが終身教

授資格を持っており，その人達は，学問の進歩発展によって自分の担当する講座がなくなってしまうことに強い抵抗を示すし，その講座，この場合コミュニティ・オーガニゼーションがいよいよなくなった場合でも，新しい講座に新しく若手教授を迎える代りに，自分達でその講座を押えてしまうということが多い。もっとも，コミュニティ・オーガニゼーションがヘラー大学院から消え去るについては，関係の講座を担当していたフレンチ博士とアプテカー博士（後者はかつてはケースワークの著作を多くものし，日本でもそのいくつかが訳されているが，1960年代にはコミュニティ・オーガニゼーションに転向していた。）が，大学院を追われるように去ったということがあった。

アメリカのソーシャル・プランニング

代りに私が専攻科目にしたいと考えたのは，ソーシャル・プランニング，社会計画であった。それはヘラー大学院自体が新しい看板として打出そうとしていたものなのだが，実際にはそのクラスは，学生達に大変不満の多いものであった。社会計画は社会変動を目指す計画というように，きわめて広く定義されたのだが，そこでいう社会変動が，小は一つの建設工事現場に働らく黒人雇用者を10%にするということから，大は国家レベルにおける社会革命までを含む概念とされたため，クラス討議がなかなかかみ合わず，新任教授の懸命の努力も実りあるものにならなかった。その教授は，3年後私が帰国する前に，そのクラスのメンバーを集めてお別れパーティーを開いて呉れたのだが，そこで皆が思い出話しのトップにあげたのは次のエピソードであった。それは，教授がある時銘々をソーシャル・プランナーに見立てて，ある小さな市（実在の市）から初年度として10万ドルの計画費が与えられたら，それをどう使うか，という宿題を出した時のことである。各自がもっともらしい予算案を立ててきた中で，ユニス・シャッツという実務経験豊富な女子学生が，思いがけず，ブラック・パンサー（日本で黒豹党と訳されている急進的な黒人グループ）に全額渡してしまうのが，最もラディカルな社会変動につながるだろうと提案した。それははからずも，それまで皆がなんとなくタブーのように避けてきた疑問，すなわち，社会変動を目指す場合に，あるいは社会計画を実践する場合に，果して専門家としてのソーシャル・プランナーが必要でありあるいは望ましい存在であろうかという疑問を，提起することになった。

アメリカの大学の長所

アメリカの大学の長所もあげて見よう。それはヘラー大学院の教授陣25名前後のうち，大学院から月給を貰っているのは5名位しかいないということである。残りの20名は，政府や民間の財団からの研究費から月給を得ている。これらの教授達にとって講義は，統計学のクルツ博士がいみじくもいったように，慈善事業なのである。こうした慣行の長所は，教授が常に実質的な調査研究に従事し，絶えずオリジナルな業績をものにしているということである。そうしていかなければ，これら大多数の教授は，大学教授の席を維持できないのである。このことは，大部分の教授をきわめてアップ・ツー・デイトにする。セミナーや個人指導が主体となる大学教育では，これは有力な長所といえるだろう。

もっとも，アップ・ツー・デイトであり得

るためには政府や財団の関係者が，常に時代の要求に敏感であることを前提とする。その点では，アメリカ保健教育厚生省の担当者は，おおむね時代の流れを理解していたようで，その研究費配分の決定こそが　実は，1960年代のアメリカの社会福祉専門教育を，ケースワーク，コミュニティ・オーガニゼーション中心から，ソーシャル・プランニングや基礎科学重視へと転換させる原動力になったと思われる。方法論衰退の点に限っていえば，もう一つの技術的な理由として，コンピューターの発達をあげるべきだろう。コンピューター利用の広まりは，調査研究に，より一層精密な統計技術の適用を要求するようになり，社会福祉方法論研究の主要な技法であったケース・スタディを，あまり科学的でないものとして一般に通用しないものにしたということがあったと思われる。

社会福祉教育の方向

このブランダイスの例からも知られるように，アメリカの社会福祉教育は，その方角を見失っている。それは，保守派からも進歩派からも，鋭い批判にさらされている。そうした事情はイギリスでも同じで，ケースワークは，心理・社会的問題を扱う方法としては不成功で，既に信頼を失ない，時代遅れである，ソーシャル・ワーカーは，要するに資本主義社会を維持するソーシャル・コントロールの機関に過ぎない，という批判が聞かれる。「学生達は，自分達の時間の大部分を，討議グループで，自らが学ぶ社会福祉の地位を危うくするために使っている。」[1]という。

ヘラー大学院は，1950年代の終りに，ケースワークへの批判から，コミュニティ・オーガニゼーション中心のカリキュラム編成で出発したのだが，1960年代の終りにはコミュニティ・オーガニゼーションすらカリキュラムから消えて，ソーシャル・プランニングとリサーチ中心に変化した。イギリスでは，1950年代の終りにゼネリック・ケースワークからソーシャル・アドミニストレーションに転換したのだが，1960年代後半には，コミュニティ・ワークが学生の人気を集めた。しかし，1968年のガルベンキアン報告にもかかわらず，コミュニティ・ワークの教育内容は混乱した状態にとどまっている。ソーシャル・アクションの意義が今，問い直されているからである。

1人の人への関心と多数の人への関心

ハルモスが1965年に書いた The Faith of the Counsellors [2]が，イギリスでよく引用される。「…カウンセラーは，1人の人への関心と多数の人への関心との間には絶対的な矛盾があると議論するだろう。」という。1人の人への関心はカウンセリングやケースワークであり，多数の人への関心はコミュニテイ・ワークやソーシャル・アクションとも読みとれるだろう。ハルモスは次のようにもいっている。「過去において社会科学への関心を促がしたのは，主として政治への嫌悪，疑問であり，それに代るものの探求であった。現在は社会科学へ向かう決定的な動機は，基礎的な人間関係における個人的な不幸のようである。」ハルモスによれば，人の運命は大規模な政治的変革によって改善され得るのだという者への拒絶から，多くの人が個人のためのカウンセリングに向かった，という。ところが，現在は，イギリスでも，多くの若者が全く新しい考えで社会福祉教育に入ってきてい

るという。マンデーは大要次のようにいっている[3]。若者達は，人は本来正しいものであるのだが，資本主義制度が貧困や貧しい住宅をもたらし，非行や精神異常を惹き起すのだと信じている。彼等は伝統的なケースワークにきわめて批判的で，改革のために働らき，戦闘を勝ち取っていく（'winning battles'）よりも，システムを変えてしまう戦争を勝ち取る（'winning the war'）ことを論ずる。彼等には，〝現実的になる〟というようなことは，のろいの言葉に通ずる。

パールマンのひがみ

アメリカのケースワークのかつての権威ヘレン・パールマンは，1971年秋に次のようにいっている。

「面白いことに，他の専門職業はその個人に対する援助の故に，非難されたり，とがめられたりはしていない。誰も弁護士に向かって，〝恥を知れ，お前は不適任な人物によって，そして，古くさい法律のもとで動かされている古びた法廷でクライエントを扱っている。そんなケースを扱うのをやめて，必要な法制度の改正に参加しろ。〟とはいわない。誰も医者に向かって，〝社会に，毎日病気や栄養不良，精神病を生む場所が残っている時に，ベッド・サイドの治療に時間とエネルギーを労費するとは，何という無責任だ。〟といったりはしない。誰も教師に向かって，学校制度の全体が腐敗していてオーバーホールを必要としている時に，クラスのお荷物になっている児童の１人１人に注意を向けるのは何と無駄なことだ。〟といいはしない。…

１人の人の今日の問題は，正義や社会改革の進展が社会の変化は生み出すのを持ちはしない。社会の変化は生み出されねばならない。ソーシャル・ワークはそれを加速するように期待される。だが，人は今助けを必要としている。個人あるいは家族の生活上の問題は，今，人を苦しめているのだ。もしこうした問題が昨日の原因の結果だとすると，これらの問題は同時に明日の新しい問題の原因である。」[4]

ここには，ソーシャル・ワークの科学性未確立への反省が見事に欠けている。

社会福祉教育の３つの対立

私のロンドン政治経済大学時代の恩師の１人であったロイ・パーカー博士（現ブリストル大学教授）は，1972年３月に，次のような分析をしている[5]。

今日の社会福祉教育には３つのジレンマがある。(1)長期教育目標と短期教育目標の間，(2)ゼネリックな教育とスペシャライズされた教育の間，そして(3)現状維持の方向をとるか現状改革の方向をとるかの間に各々ジレンマが生ずる。(1)は，われわれが未来にどの程度長く焦点を合わせるかについて生ずる。短かく焦点を合わせれば，現在の知識・技術をつめ込む教育になるであろうし，長期に焦点を合わせれば，現在のプロフェッショナリズムの影響をできるだけ小さくし，現在の知識や技術にとらわれない豊かな想像性，弾力的な思考，開発力を養なうことが必要となる。(2)のジレンマは，広く焦点を合わせるか，狭く焦点を合わせるかの間に生ずる。一つは社会と人の問題を広くとらえて，幅広い役柄に備えようというもので，総合的な計画能力を必要とする上級の職の養成に向いている。もう一つは，特殊な能力の発達，スペシャリゼーションないしプロフェッショナリズムを目標

とし，個々の現業場面に自信をもって当たれるようにしようというものである。ゼネラリストを養成するかスペシャリストを養成するかの対立になる。(3)のジレンマは，社会福祉教育の核心に触れるものである。現在，社会福祉の重心は伝統的なケースワーク（traditional casework—政治の現状維持を前提として，個人の変化適応を求めるという意味で）の境界線近くにあり，方向として急進的なソーシャル・ケースワーク（radical social casework—現状維持を拒否し，それに挑戦して社会を変革しようとするという意味で）に向かっている。その両者の間に基本的な矛盾対立がある。パーカー博士は，もしこの方向にさらに進むと，今日われわれが理解するような意味でのソーシャル・ワークに存立の意義があるであろうか，と疑問を投げている。

各国における方向の模索

このようなアメリカやイギリスの状態は，ほかの国々にどう受止められているのであろうか。1972年にオランダのハーグで開かれた第16回国際社会事業学校連盟会議が，そのことに対する一つの回答を出していると思う。

そこでは，以前と同様に，ソーシャル・ワークの実践のためのより科学的な基礎を求めようとするものと，実際の経験の分析から知識を築いていこうとするものとの対立があったが，アメリカとイギリスは今回はほぼ完全にこの対立の外縁にとどまったという。そして，その対立は，オランダのアゴロギー（Agology）とラテン・アメリカのコンシエンティザシオン（Conscientization），それにフランスのアニマシオン（Animation）の三者を巡って争われたということである。国際社会事業学校連盟事務局のケンダル博士は，この3つを次のように要約している[6]。

オランダのアゴロギーは，人間と社会関係の変化を意図的に計画する科学と定義される。問題に関与するモデルと社会技術は，心理学，社会学，哲学および倫理学から演繹され，実践の理論としてテストされる。そして実際の経験が記録され，システマティックに分析されて，法則を作り出す努力が行なわれる。オランダでは，12の大学の内9つの大学で重要な研究領域となり，大学の外にある社会事業学校を焦らせているという。

ラテン・アメリカのコンシエンティザシオンは全く違ったアプローチで，そのプロセスの目標は，人々の解放と正義の実現，そして文化革命に導く文化活動である。それはブラジルのパウロ・フレールの文盲追放運動に始まった概念で，1970年までに，ラテン・アメリカのかなりの国々で社会福祉教育および実践の指針となったという。「コンシエンティザシオンの目的は，大衆にその貧困とニードを自覚させ，その充足をどのように要求すべきか，自らの責任と，いかにしてそれを果すべきかを自覚させることにある。大衆は，自らの尊厳と自由（この場合 liberty と freedom）社会的正義と平等について自覚しなければならない。」[7]国際社会事業学校連盟会議では，チリ人民の解放への努力において，ソーシォル・ワークとコンシエティザシオンが必要な役割を果したと報告されている。

フランスのアニマシオンは，グループやコミュニティの人々に，自らのニードを自覚させ，自分達の問題に自ら答えを見付け出す能力と意志を発達させるよう援助するというものである。その経験を分析し，仮説を立て，

有効な方法を導き出そうとするものである。

ケンダル博士は，こうした経験の重視は，既成の理論がこれまで社会問題の解決に何の役にも立たなかったとして，新しい世代の人達がそれらを否定することから始まっている，と認めている。ここでケンダル博士自身に語らせよう。

「ソーシャル・ワークが個人と社会の両方の変化に向かって，同じように有効に働らきかけ得るようになるための理論ベースの探求が，続けられなければならない。その理論ベースが，多くの学問的分野からの貢献に俟つであろうことは疑問の余地がないが，ソーシャル・ワーク自身の現場の経験からの貢献も重要であり，その経験の中には，新しい系統のソーシャル・ワーカー（フランスやラテン・アメリカなどのワーカーを指す）の実際の経験も当然に含まれる。この理論ベースの確立は，ソーシャル・ワークがもしいくつもの自立的なもしくは無秩序な活動に分解してしまわないで生き延び，プロフェッションとして成長していくためには，最高のプライオリティをもってなさるべき課題である。」[8]

むすび

最近，社会福祉の分野における国際協力を盛んにすべきだということが，わが国でよくいわれるようになってきた。しかし，一体全体，日本が社会福祉の理論ベースの領域で，オリジナルに貢献したということが，今までにあったであろうか。アメリカやイギリスあるいはスカンジナビヤで発展した理論や経験を，日本で外国人に教える位いなら，あり余った外貨から奨学金を贈って，その外国人に直接それらの国に行って貰った方が，はるかに賢明なのではなかろうか。

註(1) K,McDougal, *The obsevvr* 24, 1971.
(2) P, Halmos, *The Faith of the counsellors*, London, Constable, 1965. (3) B, Munday, "what is happening to Social work students?" *social work today*, 15, June 1972. (4) H, perlman, 1971年フィラデルフィアでの講演のテキストから. (5) R, parker, 1972年1月のブリストル大学での講演から. (6) K, A, Kendal, 1972年10月ロンドンでの講演から.
(7) V, A, wolfe, "The Dilemma of Latin American Social Work" Les Carnets de l'enfanc (UNICEF), vol 19 (Jnly-september, 1972), p41. (8) (6)に同じ

編集後記

若草の季節になった。ふと思い立って訪ねた植物園には，若葉と花が溢れていた。柔らかい若葉にたわむれて，さわやかな風が流れ，けやきや松などの高い梢の上に，明るい空が広がっていた。はなみずきは風にふるえ，藤棚を飾る花の房はほのかな香りをただよわせ，また，色とりどりのつつじも咲き競っていた。大きな牡丹が咲きこぼれていたが，この花には王者の風格がある。無心に咲く色いろな花に美しいなどと考えるのは余計なことで，無心に眺めるだけでよい。それはともかく，人びとは余計なことを考えたり，理屈をつけたがるものだ。そして，平気で花の枝も折ってしまう。（平石）

海外社会保障情報 No. 22
昭和48年4月25日発行
編集兼発行所 社会保障研究所
東京都千代田区霞が関
3丁目3番4号
電話 (580) 2511～3